

伊沢修二の教育と吃音矯正

橋本雄太*

1. はじめに

伊沢修二（1851-1917）とは、日本における吃音研究の歴史において最初に取り上げられる人物である。伊沢は明治時代の近代教育における学校教育の形成に携わった。その後は日本で初めて組織的に吃音矯正を実践し、吃音矯正機関である楽石社を設立した。つまり、伊沢は学校教育と吃音の歴史において欠くことできない人物である。

しかしながら伊沢という人物の扱われ方は学校教育もしくは吃音という、どちらか片方の側面だけでしか述べられない傾向が強い。これについて、日本語学・日本思想史を専門とする山東功は「伊沢についてはその業績が多岐にわたるため、つねにある側面のみ注目される感が否めない」（山東 2008: 5）と指摘している。例えば伊沢の教育に関する研究では、主に日本語教育（呉 2016）もしくは音楽教育（奥中 2008）というどちらか片方の側面のみである。また、吃音臨床や吃音者の脳研究を専門とする菊池良和は「伊沢の弟が吃音で困っていた。そこで弟を何とかしてやりたい伊沢は、吃音矯正所を立ち上げた」（菊池 2012: 50）という伊沢に関する紹介をしている。さらに、菊池は伊沢を吃音矯正の実践者として限定的に扱っており、そこには教育者としての伊沢の側面は消えてしまっている。一方、渡辺克典（2004）は伊沢の吃音矯正を日本語教育という部分から論じ、教育者としての伊沢は少なくとも存在している。だが、伊沢の教育思想は中心的に論じられず、日本語教育もしくは言語矯正において音声重視する音声言語主義という部分だけでしか論じられていない。そのため伊沢という人物像は学問・研究分野によっては別の人物という印象を与える可能性がある。そこで音楽教育史における伊沢を研究した水崎富美（1999）は、主として音楽取調掛における伊沢の業績を中心に考察しており、楽石社の創立以降の吃音矯正や方言矯正の言語矯正に関する活動を別のものとして扱っていた。しかし、発声という意味での「音韻」に注目すると伊沢の音楽に関する活動と言語に関する活動を連続的なものとしてあらためて考察する必要があると指摘している。だが水崎においても指摘されているのは伊沢の言語や音に関する部分の連続性だけであり、教育的思想についての言及はされていない。特にこれまでの伊沢の吃音矯正法について述べた研究においては、伊沢の教育に関する思想についてはあまり述べられていない。

伊沢の吃音に関わる先行研究（菊池 2012; 渡辺 2004）においてもその連続性が途切れている可能性がある。特に吃音に関わる研究における伊沢の人物像は、他分野よりも非常に限定されている印象がある。伊沢の多岐にわたる業績は、これまでの伊沢に関する先行研究では総体としてあつかわれていない。そして、伊沢の教育者と吃音矯正の実践者という両方の関係を述べた研究は乏しい状況にある。さらに吃音矯正に関わる研究においては、吃音矯正法または言語矯正に用いられた視話法という片方の側面のみを扱っている場合がある。吃音矯正法には主に視話法（Visible Speech）という、発音記号を用いた言語矯正の方法が用いられた（渡辺 2004: 28）。伊沢は視話法を音楽教育、国語（日本語）教育、吃音矯正において用いてきた。しかし、これまでの研究では視話法と吃音矯正、視話法と国語（日本語）教育が別個に述べられてきた。視話法と音楽教育、国語（日本語）教育、吃音矯正という、複合的もしくは連続的な関係で述べられた研究は乏しい状況にある。つまり、伊沢に関する全体的と吃音に関わる部分的な部分な両方において関連性が途切れているのである。

そこで本稿では伊沢の教育において、教育と視話法との関係が深く、言語に関する活動である国語（日本語）教

キーワード：伊沢修二、近代教育、言語、吃音、吃音矯正

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2015年度3年次転入学 公共領域

育と音楽教育という要素を扱う。さらに、晩年の伊沢が中心となった楽石社の吃音矯正を扱うことにより、伊沢の教育と吃音矯正に通底する思想を明らかにすることを目的とする。

2. 伊沢修二の教育

(1) 教育

伊沢の教育者としての大きな功績は、政治学や近代思想史を専門とする尹健次によると「学校教育学の端緒を切り開いた」とされている(尹 1982: 45)。さらに伊沢は国語、理科・地理・日本史・修身等の教科書編纂にも関与している(大橋 1992)。これらのことから伊沢は近代教育における学校教育の基礎を築いた人物の重要な一人である。

伊沢は1851(嘉永4)年に信濃国(現在の長野県)の信州伊那高遠藩の藩士の家に生まれるが、貧しい環境で育った。その後、伊沢は藩学進徳館で学ぶ。藩学進徳館において伊沢は、西洋学問にも大きな関心を示していた。そして、伊沢は藩学進徳館で儒学および国家的再編のうえに洋学的知識を身につけたことから、「皇国」すなわち天皇をかなたにみすえた近代国家の建設と新たな国家意識へと向かっていった(尹 1982: 46)。1867(慶応3)年に東京で英語を学ぶ。1869(明治2)年には、藩の貢進生として大学南校(現在の東京大学)に進学する。1872(明治5)年には文部省へ出仕し、1874(明治7)年に愛知師範学校校長となる。そして、愛知師範学校校長を務めた後、1875(明治8)年にはアメリカの師範学校に留学している。近代における留学によって、先進国の制度や科学知識などを直接学び、摂取することができた。日本が近代化を促進するうえで有効な手段のひとつであり、特に教育は国民の学力や知的水準を向上させ、総合的な国力底上げを実現するものとして重視されていた(奥中 2008: 127)。このような時代背景もあり、伊沢もアメリカの師範学校に入学し、欧米の教育学を吸収し、日本に帰国した。帰国後は東京高等師範学校校長となり、欧米の教育学を日本の近代教育の形成のために導入した。そして、学校教育において中心的な役割を果たすようになる。音楽学を専門とする奥中康人によると「伊沢の生涯において、あらゆる時期にわたってその思想の基調となっていたのは国家主義的教育思想といわれている」(奥中 2008: 197)とされている。さらに、尹によると「その出発点において湾曲され、教育を人間の基本的権利として把握するヒューマニズムの思想を欠いたまま、同じく『人権の思想』が欠如した『学制』理念に役立てられるものになった」(尹 1982: 47)と指摘されている。伊沢の教育は人ではなく、国を中心とする教育であったといえる。

次に伊沢が著書において教育について述べていることを確認していきたい。伊沢は著書『教育学』と国家教育社における講演の中で自身の教育観について以下のように述べている。

教育とは何そや、完全なる人物を養成するの術なり人物即ち人とは何そや身体と精神との二者より成立して其靈万人に長たるものなり今之をして完全なる人物たらしめんには其応力と体力とを育成術即ち教育を施さゝる可らず(伊沢 [1882] 1980: 1)¹

教育とは、何かと云へば、即ち人物を造るの術である。然るこの人は既に遺伝変性のものに力に支配されて居る以上は、教育者は、能く各人若くは各族の遺伝と変性との在る所を察し、此に力を調和して、時勢に適する人物を造る事が、極必要でありませう。教育の理論は、概言すれば知徳体の三者を発達する云う事でありますが、先刻来段述ぶる如く、人には、各遺伝があり、各変性と云う者もある。夫故、各人、皆一様同等ではない。即ち各人には、皆独有性がある。(伊沢 [1890] 1986: 27)

伊沢にとっての教育とは、完璧な人間を造るための技術の一種であったと考えられる。だが、人を一様に同一ではないとしていることから、伊沢の教育は必ずしもヒューマニズムを欠いたものでないといえることができる。さらに伊沢が留学により欧米より吸収した教育学や学校教育に関わる制度は、近代日本という国家の基盤を整えるために必要であった。そのため伊沢の完璧な人間を造るという教育観は、当時の日本における歴史的背景から考えると必然であったといえる。また、伊沢は教育において音声や言語を重視しており、音声言語主義との関連性を検討していく必要がある。そこで次は、伊沢の教育と言語との関わりが深いと考えられる音楽教育と国語(日本語)教育

について述べていく。

(2) 国語（日本語）教育

伊沢は国語（日本語）教育について、明治時代における当時としては早くから音声教育の重要性に気づいており、アメリカ留学後は教育の現場において発話行為を重視する立場から音声教育に取り組み、明治時代の国字・国語問題、言文一致問題、方言矯正問題などに積極的な発言をしている（石川 2002）。さらに大橋敦夫（1992）によると、伊沢の教育観においては言語のうちでも音声言語を第一義に考えていたことが特徴であるという。後の国語読本の典型とみられる『尋常小学読本』は伊沢自身が執筆したものではないが、伊沢の口語体の採用や配列の工夫をこらしたものであり、伊沢の教育思想の影響下で成ったものであるとされている。国語（日本語）教育における業績としては、日本の国語教科書の編纂や植民地化の台湾における日本語教育が挙げられる。特に伊沢は読書科を基礎的な言語教育のための教科として規定した（甲斐 1991）。

日本における学校の教科書は、1872年（明治5）年の「学制」施行以来、自由採用であった。しかし、1886年（明治19）年の「小学校令」により、検定制度のもとで発行されることになった。その際に伊沢が国語教育において関わったのは読書科の設立及び教科書である『読本』の編纂である。明治初期における学校における国語教育の教科書は、文語文が使用されていた。だが伊沢は読書科において、韻律的な文章、口語文を採り入れようとしたのである。特にことばの教育に最も深い関わりをもつ国語科の歴史研究においては、国語教育が「国語」の形成に一定の役割を果たしてきたとされており（小島 2016）、伊沢は国語教育から音声を中心として国語の形成に力を入れていたことがうかがえる。伊沢自身も国語（日本語）教育に関する業績について、以下のように述べている。

余は明治十九年に編集局長となつて、我国最初の国定小学読本を編纂した。これは大にしては我国の教育史上に、小にしては余一身の経歴上に、大関係に有ることである（伊沢修二君還暦祝賀会編 [1912] 1988: 113）⁴

伊沢は国語教育になぜ韻律的な文章や口語体を採用しようとしたのだろうか。奥中は伊沢が1867（慶応3）年に信州高遠から東京に出てきたとき、日常会話に戸惑ったと推測している。つまり、伊沢が過ごした明治時代の日本の話し言葉の状況が背景としてあると考えられる。明治日本は廃藩置県や四民平等によって自由な移動が可能となり、国民の話し言葉をどうするかを重要な課題としていた。そこで伊沢は方言を矯正しなければならないと考えたと推定される。この経験から伊沢は韻律的な文章を国語科の教科書に採用することにより、国民の方言を矯正しようと試みたと考えられる。伊沢は国語教育で口語体を採用することにより方言矯正をおこない、音声言語を中心とした国語もしくは日本語を確立しようとしたのである。

マイノリティの言語文化の存在を無視するようなこうした言語改革について奥中は、一見するとかなり強引な中央集権的文化政策のようだが、国民が自分の意見を表明したり、他人の意見を聞いたりする基礎能力は、民主主義の根幹に関わっており、むしろ言語マイノリティが不利益を被らないようにするための一種の啓蒙運動とも考えられるとしている（奥中 2008: 154-5）。それに加えて音声言語を中心とした国語もしくは日本語を確立することにより、伊沢自身の教育思想の一つでもある国家主義的教育を成し遂げようとしたとも考えられる。そして、明治時代の日本における口語体の方言による国民間のコミュニケーション障害を取り除き、ひとつの言語文化に統一して、国民が自由に意思を疎通できるようにしなければならないと伊沢は考えたのだろう。伊沢は1903（明治36）年の楽石社を設立以後に、視話法を応用し、東北地方の方言を矯正する実践にあたり、以下のように述べている。

東京は政治文芸商工等百般の文化の中心であつて、聖上のまします帝都でありますれば、此中心の弁よりもするのは、最も至當なることであつて田舎弁の如き地方的方言をあやつる要はないのである。故に政治上其他の関係よりして東京弁を使用するに至らしめ、地方的方言は之れを打破すべきであると云ふのが、有力なる論拠となつてをるのであります。然らば此問題を如何に解決すべきか、こは余程六ヶ問題でありまして、私は固より絶対的に方言を打破せよとは申しませぬ。唯方言にては他の国の人に通じないのが困ると申すのである。それですから、私は諸君が方言で話し又東京の普通弁でも話すことが出来る様になつらばよろしいからとふの

であります。(伊沢 1909: 3-4)

伊沢は音声言語を中心とした言語的マイノリティという経験と国民形成という二つの視点から方言を矯正しようとしたのではないだろうか。方言を矯正することにより、国民間にある言語障害の障壁を崩そうとしたのである。また伊沢は、後に取り組むことになる吃音を個人の言語障害とは捉えていなかった可能性がある。伊沢にとっての言語障害とは国民間の話し言葉が方言などで異なることによるコミュニケーション障害だったからである。

一方で伊沢は英語の発音が苦手であり、アメリカ留学中に英語の発音を、電話の発明者として有名なグラハム・ベル (Graham Bell, 1847-1922) に、視話法で発音を矯正してもらっている。伊沢と出会った当時のベルは、演説や話し言葉のインストラクター、あるいは言語障害者に発話や発声の技術を教える教師として名前が知られていた。そこでベルは視話法を用いて、自分の声で伊沢の英語の訛りをそっくり再現し、正しい発音との違いを伊沢に認識させた (奥中 2008: 154-5)。そして、伊沢はベルに自分の英語の発音を矯正してもらい、視話法のメソッドそのものを伝授してもらったとしている。視話法は 1860 (安政 6) 年頃にアレキサンダー・メルヴィル・ベル (Alexander Melville Bell, 1819-1905) によって開発された (呉 2016: 294)。アレキサンダーはグラハム・ベルの父親である。そこで伊沢は英語の発音が苦手であることと視話法の関連について以下のように述べている。

困ったことが二つあつた、其一は言葉が十分に出来なかつたいふことであつて、余は外国語をば、十八歳の時から始めたのであるが、前に既に語つた通り、初はオランダ語から学び、後東京に出て、オランダ語の素地に成れる英語の先生に学んだなどというふ経歴で、随分ひねくれた英語でやつて来たのであるから、中々向ふ人に解る様に話すことが出来ぬ、これには非常に難儀したのであつたが、後にベル氏に就いて、視話法の教を受け発音を矯正して以来、卒業当時は普通の談話に差支へぬようになり、然かも其の於ては、視話を応用して仕事をしてをるやうになった。(伊沢修二君還暦祝賀会編 [1912] 1988: 27-8)

帰国後の伊沢は視話法を用いた国語 (日本語) 教育や唱歌による音楽教育の分野において活躍している。そして伊沢は視話法を中心に活動をすることになる。伊沢が方言により日常会話に困惑し、英語の発音が苦手だったことから、音声言語を第一義と捉えていたと考えられる。このことは吃音を社会学の視点から論じている渡辺の、「伊沢にとって音声言語は特別な意味をもっていた」(渡辺 2004: 28) という指摘からも推測される。また先述に述べた楽石社による方言矯正や英語の発音矯正からも伺うことができる。

しかし、奥中によると方言による言語の障害者への啓蒙活動や地方の方言矯正によって、それまでにあった日本語を改良すれば、標準的な国語によって円滑な国内コミュニケーションがおこなわれると伊沢は信じていたとされている (奥中 2008: 179)。伊沢は文明国であるアメリカの国語 (英語) を日本に移植しようなどとはまったく考えていなかったのである (奥中 2008: 162)。つまり、音声を中心とする国語を形成することにより、円滑なコミュニケーションがおこなわれる先進的な国民の形成を目指していたのである。

伊沢と音声や言語を強く結びつけたものとして、伊沢自身が自らの方言による訛りに悩み、英語が苦手という経験から音声や言語が特別な意味をもっていたことが挙げられる。特にこの結びつきは、伊沢と言葉もしくは音声言語という強固な関係を構築している。伊沢にとっての言語に関わる特に国語 (日本語) 教育とは、自らの負の経験の克服と理想を実現するための教育を成し遂げるためのものであったのである。

(3) 音楽教育

伊沢の多様な業績の中でも音楽教育は、主要なものの一つである。とりわけ、伊沢は音楽教育の一つである唱歌に深く携わっている。特に伊沢の教育思想は、師範・体育・音楽の教育現場における実践をとおしてより深められていっており (尹 1982: 48)、伊沢の教育内容を理解する上で唱歌による音楽教育と言語との関わりは必要である。

1872 (明治 5) 年の学制発足当時の日本における音楽教育は具体化が遅れていた (宮坂 2012)。そこで奥中 (2008) によると伊沢はアメリカ留学前からヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) やフリードリヒ・フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) の教育思想を十分に吸収して、低学

年児童教育における唱歌の役割を大きく認識し、愛知師範学校において唱歌遊戯の試作をしていたとされている。そのため留学中の伊沢は7音階が苦手な日本人向けの音楽教材の開発にも取り組んでいる。そこで唱歌が苦手だった伊沢は1875（明治8）年のアメリカ留学において、音楽教育家のルーサー・ホワイトティング・メソン（Luther Whiting Mason, 1818-1896）の元で唱歌を勉強した。これは、伊沢の留学中で最も大きな出来事であった（奥中2008:136）。伊沢は唱歌を苦手なことについて、以下のように述べている。

他の一つは音楽が少しも出来なかつたというふことである、従来の余の経歴談を読んだ人は、伊沢は音楽に於ては、最も得意であつたろうと想像するであらうが、事實は全くそれと正反対で、音譜などが殆どものにならず、1（ヒー）2（フー）丈は可いが3（ミイ）となり、4（ヨオ）となれば皆上がり過ぎて、先生にも叱られ自分は尚ほ種々に苦心したけれ共、それでも殆ど唱歌にならなかつた。（伊沢修二君還暦祝賀会編 [1912] 1988:28）

伊沢は留学をしていたアメリカの師範学校でも唱歌の科目を履修していたが、唱歌が苦手であり、うまく出来なかつたのである。そのため留学先での音楽研究では音階練習をしている。音階練習においても伊沢はベルの視話法によって日本人が苦手であった7音階の習得を可能とし、音楽と言語という別々の領域を、音声に着目して関連付けようとしていたようである（奥中2008）。伊沢は留学前から音楽教育を重要視していたが、留学中での唱歌の練習により、音楽と言語をより深く結びつけたのである。

そして、アメリカ留学を終えた後の1879（明治12）年には音楽取調御用係に任じられ、翌年にはメソンを日本に招き、音楽に関する調査をはじめ、その過程で日本の箏曲や雅楽と西洋音楽との類似性を発見するなどの成果を得た（宮坂2012）。そこで伊沢は音楽教育の唱歌で重要な要素は歌詞であるとした。そして、唱歌の歌詞について句数字数といった具体的な韻律的側面への配慮が重要であると指摘したのである。それは正しく歌えなければ全く話にならないと考えていたからである。特に韻律的側面への配慮ができるのは、言語に通曉した者であり、主に国語教育に携わっていた者であり、教育的配慮に目が向きやすい者である。つまり、国語教育の中から唱歌教育は誕生したともいうことができる（山東2008:20）。さらに国語と唱歌の関係は単に文書内容だけではなく、生理的・身体的な音の発声を含んだ広く「音韻」という意味で密接な関連が示されていると指摘されている（水崎1999）。そこで長志珠絵（1998）は「国民国家としてのシンボルがまずは、音とことばによってもたらされるものであるにせよ、そもそも両者が『自然に』結び付くためには、言語学的な『知』や、出版言語を想定した、口語の規制といった様々なイデオロギー装置を積み重ねていかざるを得なかつたのである」（長1998:50-1）としている。

また伊沢は英語と同様に唱歌も苦手だったが、視話法との出会いにより苦手な唱歌を克服する方法を見つけることができた。伊沢の音楽教育は歌詞における音韻に着目するのが特徴であり、音声言語を第一義ないしは中心としたものである。国語（日本語）教育だけではなく、音楽教育においても伊沢の教育思想が反映されている。さらに伊沢の国語（日本語）教育における教科書編纂という業績が、音楽と言語を結びつけたのである。これは音声や言語を重視していた伊沢だからこそ結びつけられたものである。

(4) まとめ

伊沢の教育は自身の苦手の克服と国家主義的教育思想を達成するものであったということが出来る。これは伊沢がアメリカ留学や文部省でのキャリアを重ねていく過程で徐々に形成された。奥中によると、まとまった形で表明したのは明治20年代、伊沢が国家教育社という団体を創設し、民間の立場から精力的に教育活動を展開していた時期であった（奥中2008:197）。特に国家教育社が発刊していた雑誌は伊沢が皇国主義であったことを伺うことができたと言われている。その後、伊沢は日本初の吃音矯正機関となる楽石社を設立することになる。さらに尹も「伊沢の『国民』形成は、『人材養成』と『教化』によって特徴づけられる維新政府リーダーの教育観と軸を一にし、まさに富国強兵の国家目的に直結させられるものになった」（尹1982:197）と指摘している。伊沢にとって言葉は教育の中心と据えられ、国家を富国強兵へと導くものであったといえよう。さらに伊沢は国語（日本語）教育と音楽教育という音声言語を中心とした教育という技術を用いて完璧な人間を造ろうと試みたと考えられる。さらに学校は

伊沢が理想とする完璧な人間を造るための工場であったとも理解することができる。

3. 吃音矯正

伊沢は公的教育から身を退いた後の1903(明治36)年に日本で、初めての吃音矯正所である楽石社を設立している(伊藤1974)。伊沢が視話法による吃音矯正の示唆を受けたのは、1898(明治31)年のベルが来日した時であり(呉2016)、先述した伊沢の国語(日本語)教育や音楽教育の後である。そのため伊沢の音声言語主義が最も密接な関係にあるのが視話法と楽石社による事業である。楽石社の創立において、伊沢は抱負を同社規定で以下のように述べている。

楽石社は余が老余の事業として営まんとする各種の実験を試す所なり之を楽石社と称する所は余久しく小石川に住せるにより礫川の礫字に因みて別号を楽石と称する故その社名にも之を冠したるなり楽石社に各科の研究部を置く見込なり漸次成立に至るに随て之を発表す可けれども今は唯言語研究部の事のみを揚ぐ(故伊沢修二記念事業会編纂委員会編[1919]1988:243-4)

楽石社には(1)視話法を伝習す、(2)正しき日本語音を伝習す、(3)正しき英語音を伝習す、(4)正しき清国語音を伝習す、(5)正しき台湾語音を伝習す、(6)方言の訛を矯正す、(7)吃音を矯正す、(8)唾子にものを言はしむ、という7つの科が設けられていた。吃音矯正が中心ではなく、音声言語を主とした機関であったのである。これらは伊藤(1976)や渡辺(2004)らの先行研究でも同様の指摘がなされている。次に楽石社の活動をしていた頃の伊沢の言語観について考えていきたい。呉(2016)によると伊沢は人間が動物より優れているのは言葉をもっているからであったと述べていたという。ここでいう言葉とは、音声言語主義の伊沢であることから話し言葉であり、音声言語であり、伊沢は、話し言葉の音声について、それを媒介とした思想伝達的手段として重視し、視話法による言語矯正はすべての人間にあてはまる言語矯正であるとしている。伊沢は『視話法』の序文に自らの言語観について以下のように述べている。

この言葉の助によりて、同類互にその意思を交換し、智恵をひらき経験をつみ、つひにこれを子子孫孫につたへて、今日のごとく、人類の地位をたかむることをなしえしなり。

されば言葉は、人類特有の武器にして……ただ人類の発音を正確にあらはし、たやすく同類に理解せしめ、ひろく世界に伝播せしむるの法をうるをいふのみ(伊沢1901:II-III)

さらに伊沢は人間が動物より優れているのは言葉を持っていることにより、子孫に知恵や経験について伝えることができるとしている。この点は呉(2016)は明確には論じていない。楽石社は吃音矯正だけではなく、方言矯正もしており日本国内における音声言語を中心とした言語的統合を目的にしていたと考えられる。その言語的統合は子孫に伝えていかなければ意味がなかったのである。そして、吃音矯正はその延長であると理解されているのではないだろうか。さらに渡辺(2004)によると、楽石社は英語や中国語の教授活動もしており、楽石社の活動は日本国内における言語的統合に限定されておらず、日本語または外国語の教授という活動目的から理解する必要があると指摘されている。しかし、伊沢は楽石社の研究体制を構築するため趣旨書によって広く志願者を募集したが、結果的に集まったのは吃音矯正希望者のみであった。伊沢の自伝に当時の状況について述べられている。

視話法、英語、支那語等に重きを置き、之が教授に一身機軸をと心掛け其教案迄作成されたのである。然るに事は意外に出でて、いざ生徒募集となりて集り来つた者は十二三歳の少年より十七八歳の青年……五十歳の老人も交つて僅に七名、皆吃音の矯正を希望する者のみで、他の科目に対する志願者は、皆無と云う有様であった。(故伊沢修二記念事業会編纂委員会編[1919]1988:248)

そのため楽石社の事業は吃音矯正が主となるのである。吃音についてバリー・ギターは「古くから知られている障害であり、4,000年以上前の中国文明、エジプト文明、メソポタミヤ文明のどの時代にも存在した証拠が残っている」(Guitar 2006=2007: 5)と述べ、吃音の「どもる」という事象は近代以前から知られていると指摘している。さらに吃音に関する研究は大橋佳子(1989)によると吃音の原因究明への試みは、近代以前のヨーロッパで始まり、主に音声学、耳鼻咽喉科、ろう教育などの分野で、医学的研究モデルにもとづいて行われていた。17世紀頃から吃音を身体の構造や機能の障害と考えて、治療法を行った医者や学者がいた。19世紀のヨーロッパやアメリカでは、構音器官の一部を手術することによる治療がなされたが、効果は部分的であり、永続的なものでなかった。一方、吃音を神経症とみなす考え方や、不規則な神経活動や神経支配の不調和によって吃音が発言するという考え方も19世紀にはすでに存在していたようである(大橋1989)。しかし伊沢による吃音の定義は、身体(発声器官)に生じている後天的な習慣もしくは癖であった(菊池2016: 149-50)。伊沢自身も以下のように述べている。

此の吃りと云うものは、声に一種の悪癖が付いたのものであると云うからは、先づ第一に其の癖が付いたとは如何なることかと云うことを了解しなくてはならぬ。(伊沢[1912]1985: 292)

そのため伊沢が吃音考える吃音の原因には先天的な要因は存在しないのである。現在においても吃音の原因は不明である。しかし、吃音は後天的な習慣もしくは癖ではないといわれており、伊沢が悪癖としていたのとは異なっている。また、吃音矯正も伊沢の発明であるとされており、当時においては珍しい存在であった。

日本に於ける吃音矯正と云ふ事業は全く先生の発明で、従って吃音矯正と云ふ言葉も新しいのであるのだ。されば其始め、世人は薬でも呑ませる、まじなひでもするのか、何しろ小石川にどもりをなほすお医者さんが出来たさうだから、試に行つて見て貰はう位であつた。然るに想像とは違つて科学的にして合理的なる、熱心なる先生の矯正法に依り、軽きは三週間位で、常人の如く話せるようになり、直つた人たち自身も、是は神業かと不思議に思ふ位であつた。(故伊沢修二記念事業会編纂委員会[1919]1988: 248)

楽石社の吃音矯正について渡辺は「伊沢による言語矯正は個人的な問題である発話の矯正のみで成立しているわけではない。正常な発話を測定するような方法や、矯正を吃音者の精神と結びつけることで、吃音矯正は実践されていたのである」(渡辺2004: 32)であると述べている。さらに、水崎によれば伊沢の言語矯正における実践においても国語と唱歌の関連をみることができ、楽石社での発音矯正において「唱歌」の練習が頻繁に導入されていた(水崎1999)。吃音矯正は伊沢のこれまでの国語(日本語)教育や音楽教育を包括したような内容であったといえる。

楽石社の吃音矯正では試験問題を達成すると吃音は治ったとみなされていた。だが、その試験問題は滑舌を矯正することを目的とした内容であり、吃音が表に出てこなければ治ったとされていた(菊池2016: 149-50)。

だが、伊沢は吃音の原因を後天的な悪癖であるとしていたことから、癖が無くなると吃音は矯正されたと解釈されていたと考えられる。しかし、現在の吃音研究では吃音は氷山のようなものであり、大部分は水面の下にある。吃音が表から見える言語症状は氷山の表面のごく一部で小さい。その下に恥ずかしさ、恐れ、罪の意識の大きい部分がかくれているとされている(Sheehan 1970)。伊沢による吃音矯正は視話法による音声言語主義であるため、吃音症状だけが表から見えなくなれば、治ったと判断されたと考えられる。そして、視話法による吃音矯正は発話の悪癖を治すだけでなく、吃音者の精神修練を備えることで成立していた。そのため吃音の再発は精神修練の不足とされていた(渡辺2004)。これは伊沢が自身の教育観において、身体と精神の両方を備える者が完璧な人間であると考えていたからであろう。また、伊沢の吃音矯正法は訓練が可能な吃音者が対象となり、主に呼吸練習、発声練習、精神強化を三本柱として、大きな成果があったとされる。しかし、吃音者自身がこの矯正法を体験したところ、会場で矯正を受けている時は治ったが、一步会場から出ると吃音が治っていなかったことから、絶望感に襲われ、ますますひどくなった記憶があったという(岡部1982)。楽石社の吃音矯正法は日本で初の吃音矯正法であり、吃音に取り組み始めたことの成果はあったといえるが、全ての吃音者に効果があったわけではなく、治らないという事例もあった。戦後は伊沢の事業を参考にしてつくられた矯正所における吃音矯正法に対し疑問や不満を持つ人々が集

い、セルフヘルプグループである言友会（日本吃音矯正会）をうみだした（伊藤 1976）。

伊沢による楽石社の吃音矯正事業は戦前の日本における唯一確立された治療方法であり、講演会・講習会・支部設立などの幅広い治療活動を行っていた（呉 2016）。吃音矯正が評判となり、当時の日本は世界一の吃音治療大国となった。楽石社は国（内務省）から莫大な支援を受け、貧困者には無料で吃音矯正を行っていた。またアメリカとドイツのようにまだ吃音矯正が行われていない国でも伊沢の手法は紹介されるなど、世界でも最先端な取り組みであった。だが、吃音矯正が上手くいったために、吃音研究においては伊沢の視話法による吃音矯正だけが注目されやすいと考えられる（菊池 2012: 51, 2016: 149）。

さらに楽石社の吃音矯正は効果が著しいことから、民間矯正所だけではなく、東京市の小学校訓導において吃音矯正教師となる免許状が授与されており、楽石社の吃音矯正が学校教育においても実践されたことが示唆されている（呉 2016）。

楽石社による吃音矯正はこれまでの研究では伊沢の音声言語主義との関連でしか述べられていない傾向があった。しかし、伊沢による矯正は身体と精神を備えた完璧な人間を作るための一種の技術でもあり、伊沢にとって吃音者は両方を備えていない存在であったと考えることができる。また音楽教育も取り入れられており、それまでの伊沢の国語（日本語）教育と音楽教育という要素を包括した内容であったともいうことができる。

伊沢の言語観によると、吃音者は流暢に発話ができず、さらに吃音矯正の修了後に吃音が再発したものは、完璧な人間とみなされていなかった可能性がある。もしかすると伊沢にとって吃音者は、完璧な人間を作るための、実験の道具的な存在であったとも考えられる。楽石社の吃音矯正や方言矯正は、伊沢にとって自らの理想とする教育思想を達成するための活動であったともいうことができる。

4. おわりに

伊沢の教育と吃音矯正は関連性がない断片的なものではなく、音声言語主義や視話法によって、教育と吃音矯正は通底していることが明らかにされた。また、伊沢は日本における近代学校教育において音声言語主義というものを採り入れることにより、教育思想の一つである国家主義的教育を成し遂げようとしていたのである。伊沢にとって、学校や楽石社は完璧な人間を造るための工場であり、教育は完璧な人間を造るための一種の技術であった。これまでの伊沢の吃音研究では教育に関する言及が充分にはされておらず、伊沢が吃音者を完璧な人間としては扱ってこなかった可能性があるということは述べられていない。これは本論文が伊沢の教育と吃音矯正との関係を考察することにより明らかになった。

伊沢による音声言語主義には、伊沢の唱歌や英語が苦手という負の経験と教育思想という2つの組み合わせが重要である。もし、伊沢が唱歌や英語を苦手ではなかったら視話法にも出会うことがなかったことであろう。明治における日本であるからこそ、伊沢の教育思想と視話法が出会うことになったのである。

伊沢の音声言語主義に対して水崎は「教科としての『教育内容』と求めるのではなく、教科を超えた『学校教育の内容』における『音』という領域を鮮明に解明できる」（水崎 1999: 95）と指摘している。しかし、「音」という領域だけではなく、伊沢の教育思想という領域に着目することでより鮮明に解明できるのである。これまで伊沢の「音」の部分に着目され過ぎたことにより、伊沢の教育思想の領域まで十分に研究されることはなかったと考えられる。伊沢の国語（日本語）教育と音楽教育には、伊沢による音声言語主義と国家主義的教育という連続している二つの柱を持つ。これは教科という枠を超えた学校教育全般の基礎なのではないだろうか。近代の学校教育における教科書編纂に関わった伊沢は、教科書というメディアを用いて国家主義的教育を達成しようとしたと見ることができる。ベネディクト・アンダーソン（Benedict Anderson）は出版による共通の言語の普及が、見ず知らずの者の間に「想像上のコミュニケーション」の場を提供し、国民という共同体の出現を可能ととしている（Anderson [1983] 1991=1997）。伊沢は読書科における教科書で音声を中心とした言葉を普及させることにより、国民形成を図ったと考えることができる。

しかしながら、伊沢の教育の理想を達成するための活動であった楽石社の吃音矯正事業は、社会事業の枠を出ることなく、学校教育につながることもなく、後の公教育としての言語障害児教育の進展に影響を与えることはなかつ

たとえられる（綾部 2017: 272）。そのため学校教育とのつながりで、伊沢の吃音矯正は述べられることはなかったのだろう。さらに、伊沢の業績が多岐に渡ることにより、教育と吃音矯正との関係が断片的にしか扱われてこなかったと考えられる。

今後の課題としては、なぜ伊沢がはじめた楽石社の吃音矯正が社会事業の域から出ることなく、公的教育へとつながらなかったのかを明らかにする必要がある。

注

- 1 文語体はカタカナ表記からひらがな表記に変更し、ひらがな表記に統一している。また、旧字体は新字体表記に変更している。

文献一覧

- Anderson, Benedict, [1983] 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London, Verso. (= 1997, 白石隆・白石さや訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.)
- 綾部泰雄, 2017, 「わが国の言語障害児教育のあゆみと日本言語障害児教育研究会」日本言語障害児教育研究会編『基礎からわかる言語障害児教育』学苑社, 271-90.
- 呉宏明, 2016, 『日本統治下の台湾の教育認識——書房・公学校を中心に』春風社.
- Guitar, Barry, 2006, *Stuttering: An Integrated Approach to Its Nature and Treatment* (3rd Edition), USA, Lippincott Williams & Wilkins. (=2007, 長澤泰子監訳, 『吃音の基礎と臨床——統合的アプローチ』学苑社.)
- 伊沢修二, [1882] 1980, 『教育学』国書刊行会.
- , [1890] 1986, 「進化論と特殊教育」『国家教育』3: 24-8.
- , 1901, 『視話法』大日本図書.
- 編, 1909, 『視話応用東北発音矯正法』楽石社.
- 編, [1885] 1912, 『吃音矯正の原理及実際』日本図書センター.
- 伊沢修二君還暦祝賀会編, 1912 [1988], 『楽石自伝教界周遊前記』大空社.
- 石川巧, 2002, 「音声の進化論——伊沢修二の言語観とその実践」『国文学論考』38: 12-25.
- 伊藤伸二, 1976, 「吃音問題の歴史——楽石社と言友会をめぐって」『大阪教育大学紀要』23 (6): 131-6.
- 甲斐雄一郎, 1991, 「読書科における二元的教授目標の形成過程」『国語科教育研究』38: 107-14.
- 菊池良和, 2012, 『エビデンスに基づいた吃音支援入門』学苑社.
- , 2016, 『吃音ドクターが教える人と話すのが楽しくなる本』KADOKAWA.
- 故伊沢修二記念事業会編集委員編, [1919] 1988, 『楽石伊沢修二先生』大空社.
- 小島千裕, 2016, 「小学校教育における方言矯正をめぐる状況」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』126: 19-41.
- 宮坂朋幸, 2012, 「伊沢修二——音楽教育の創始から吃音矯正事業へ」沖田行司編『人物で見る日本の教育』ミネルヴァ書房, 163-71.
- 水崎富美, 1999, 「近代日本の『学校教育の内容』——校歌をめぐる『音韻』を通しての『国語』の統一」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39: 87-96.
- 岡部和望, 1982, 「学童児童の治療教育」内須川洸・神山五郎編『吃音講座言語障害治療教育』福村出版, 140.
- 奥中康人, 2008, 『国家と音楽——伊沢修二がめざした日本近代』春秋社.
- 大橋敦夫, 1992, 「伊沢修二の日本語教科書編纂——現存資料の紹介と『東語初階』の内容分析」『学海』上田女子短期大学, 8: 1-5.
- 大橋佳子, 2008, 「日本の吃音支援の現状——直面する課題と未来への展望」『コミュニケーション障害学』, 25: 111-20.
- 長志珠絵, 1998, 『近代日本と国語ナショナリズム』吉川弘文館.
- 山東功, 2008, 『唱歌と国語——明治近代化の装置』講談社.
- Sheehan, Joseph G., 1970, *Stuttering: Research and therapy*. New York, Harper and Row.
- 渡辺克典, 2004, 「吃音矯正の歴史社会学——明治期・大正期における伊沢修二の言語矯正をめぐる」『年報社会学論集』17: 25-35.
- 尹健次, 1982, 「明治前期国民形成論の展開——伊沢修二の教育思想にみるその一研究」『教育学研究』49 (2): 45-54.

ISAWA Shuji's Education Philosophy and Stuttering Correction

HASHIMOTO Yuta

Abstract:

ISAWA Shuji is a leading figure in developing modern education in the Meiji Era. He also established the first stuttering correction institution in Japan, Rakuseki-sha, which practiced the stuttering correction using visible speech. Since Isawa contributed to wide range of fields including national language (Japanese) education, music education, and stuttering correction, most of previous research focused only part of his achievement, and, comprehensive analysis that correlates his multiple achievements has been not sufficient. This paper aims to reveal the consistent philosophy, on which Isawa based for his contribution in these fields, by studying Isawa's writings. The result indicates that Isawa believed voice and language were important for education, and he believed that education was a tool to make perfect people for the nation state. It is also suggested that Isawa recognized stutterers were imperfect person. In conclusion, the comprehensive study on Isawa's contribution in wide range of fields is important.

Keywords: ISAWA Shuji, the modern Japanese education, language, stuttering, stuttering correction

伊沢修二の教育と吃音矯正

橋 本 雄 太

要旨：

伊沢修二は、明治時代の近代教育における学校教育の形成に貢献した人物であり、日本で初めて視話法を用いた吃音矯正機関である楽石社も設立した。伊沢は業績が多岐に渡るため、先行研究では一部の側面を取り上げた研究が多い。そのため国語（日本語）教育、音楽教育、吃音矯正という複数の要素を関連付けた分析が十分ではない。本稿の目的は、伊沢の教育と吃音矯正に通底する伊沢の思想を明らかにし、考察することである。研究対象は主に伊沢の著書である。結果として伊沢は留学などの経験から音声や言語を教育において重視する音声言語主義を取り入れ、また教育を国家のために完璧な人間を造る一種の技術と考えていた。この思想が伊沢の教育と吃音矯正に通底しており、さらに、伊沢は吃音者を完璧な人間として扱っておらず、楽石社の吃音矯正は伊沢の完璧な人間を造るという教育の思想を達成するための活動であったことを明らかにした。